

まえがき

体が大きく、頑丈な体を持ち、病気とは一切縁のない息子。

泳ぐことが大好きで、手には水かきを持ち、足首が柔らかく、キック力はずば抜けていました。

そんな子がある日、突然、右肺に悪性腫瘍が見つかり、かなり進行していました。3か月の抗がん剤治療。最終クールには、本人がその辛さに耐えられず、「もう無理」と担当医に告げ、中止となりました。あれだけ強い子が言うのですから、私たちには考えられない程の辛さだったと思います。

実際、抗がん剤の量は、一般の人より大量でした。投与の量は体の大きさに比例するとのこと。そのうえ、一般の医師は、できるだけ多くの量を投与したがるのだそうです。

息子の腫瘍は通常のがんと違い、抗がん剤の効果が大きいと担当医が話していました。事実、投与開始直後に腫瘍マーカーが正常になりました。しかし、腫瘍は大きくなっていました。その原因は分からないとのことでした。

手術前日、血小板数の低下、そして吐血もありましたが、予定どおり施行されました。

麻酔終了後、血小板が手術困難の数になっていましたが、手術は続行され、結果は大成功でした。転移もなく、息子の強さを信じていた私たち家族は、やはり、病に勝利したんだと、心の底から喜びました。

しかし、この平穏な日々は1週間しか続きませんでした。激しい頭痛のため再入院となりました。血小板数が低く、その原因は不明とのことでした。輸血治療しかなく、原因不明の血小板低下は続き、入院から1週間後、1歳半の愛娘と結婚したばかりの愛妻を残し、25歳で逝ってしまいました。

担当医の最初の説明の時、「セカンドオピニオンはどうしますか。レントゲンなどすべてお渡し致します」とのことでしたが、「セカンドオピニオン」は当時、私たちの頭にありませんでした。

今になってその大切さは身に沁みています。同じ病でも人によって多様です。医師はいかに多くの引出しを持っているかが問われますが、ただそれも一人の医師では限界があります。ならば、「セカンドオピニオン」を設定すべきです。そして、いくつかの選択肢の中から患者、家族が選択するのです。結果がどうであれ、複数の選択肢から自らが選択した医師、治療法ならば、ある程度は諦めがつきます。

他に治療法があったこと、症状の変化に対応できる医師も大勢いたこと、これらのことを今になり知りました。

私たちは息子の体力を過信し、一人の若い医師にすべてをまかせていました。この病をできる限り知るべきでした。頑強な息子の死などありえない、としか考えていませんでした。何年たっても後悔が頭から離れることはありません。息子は、娘に水泳の楽しさを教え、将来スポーツ選手と結婚させるんだと言っていました。それもできなくなりました。

しかし、きっといつでも娘の側に寄り添って見守っていることでしょう。

2014年4月

菅野 雅敏